

# 後醍醐天皇をめぐる三人の齋宮たち

— 辨子内親王・権子内親王・祥子内親王 —

安 西 奈 保 子

斎宮は後醍醐天皇の皇女祥子内親王をもって廢絶する。祥子内親王と、父を同じくする異母姉前斎宮宣政門院と権子内親王、そして、後醍醐天皇の姉達智門院と辨子内親王の三人について残された歌を通してその生涯を考え、三人の歌の視点の相異を万葉歌人大伯皇女の歌を通して見ていくこととする。

## 一、辨子内親王

辨子内親王は後宇多天皇の第一皇女、弘安九(三六〇)年閏十二月に誕生。増鏡に「一院は忠継の宰相の女の中納言典侍殿といふ腹にも、男女みこたちあまた物し給ふ中に、すぐれ給へる内親王を、いとかなしきものにかしづき聞えさせ給ふ。」とあり、父帝の深い愛情を受けて育った。同母の兄弟には後醍醐天皇、承覚法親王、性円法親王がある。乾元元(三三三)年十二月二十六日十七歳で内親王宣下。同年十一月二十三日二条為世に新後撰集撰進の命が下り嘉元元(三三三)年十二月十八日薨覽。この集に辨子内親王の歌は①②③の三首が入集。いずれも題詠と思われ、十八歳までに作られた歌でまだ若々しい詠風である。

(暮秋の心を)

辨子内親王

①なが月や秋の日数もいまいくかのこるこずゑの紅葉をかみん

(巻五・秋下)

(題しらず)

辨子内親王

②せかであらまほしものの中中につつめばあまる我がなみだかな

(巻十一・恋一)

(題しらず)

辨子内親王

③よそにのみ猶いつまでか思ひ川わたらぬ中のちぎりのまん

(巻十二・恋二)

嘉元三(三三三)年九月十五日には祖父龜山院が崩御。増鏡に「御日数の程は帥宮ひとつ御腹の内親王などもこの院におはします程つれづれなるままにはかなし事など聞えかはして花紅葉につけても睦じく馴れ聞え給ふべし。」とあり、辨子内親王が祖父崩御の後、弟帥宮(後醍醐天皇)と共に龜山院で過していたことがわかる。この頃の歌が④⑤⑥。

これらをとりに集めて、北殿の内親王の御方へ奉らせ給へれば④さすがなほ色は木の葉に残りける形見もかなし秋の別れ路

後醍醐天皇をめぐる三人の齋宮たち — 辨子内親王・権子内親王・祥子内親王 —

(増鏡・さしぐし)

雨うちそそきてけはひあはれなる夜、いたうふけて、帥宮、例の北殿へ参り給へれば、姫宮も御とのごもり、さぶらふ人々もみなしづまりぬるにや、格子などたかせ給へど、あくる人もなければ、むなく帰らせ給ふとて、書きてさしはさませ給ふ。

⑤おのづからながめやすらんとばかりにあくがれ来つる有明の月

御返し、又の日、

⑥いたづらに待つ宵すぎし村雨は思ひぞたえし有明の月

(増鏡・さしぐし)

いづれも帥宮からの働きかけを受けての詠であるが、二十歳の時の歌とはいえ、しつとりとした歌であり、④などは祖父龜山院を亡くした悲しみを切々と歌い込む。帥宮は後に後醍醐天皇となり皇子内親王を尊称皇后として待遇するが、前述の増鏡からも、すでにこの頃からこの姉弟は親しい歌のやりとりをしており、仲の良い姉弟であったようである。翌年の徳治元(二三〇)年十二月二十二日二十一歳の皇子内親王は伊勢齋宮に卜定。同二年九月二十三日諸司の御所に渡御し、同月二十七日野宮に移御。延慶元(三三〇)年九月の群行を前に八月二十六日後二条天皇崩御により退下。わずか二年の齋宮生活であった。この頃の歌が⑦⑧⑨⑩⑪である。

野宮にて雪のふり待りければ

皇后宮

⑦雪にだに跡まつかたぞなかりけるあだにもこえぬ神のいがきは

(続千載・巻六・冬)

皇后宮、齋宮と申しける時、たてまつられける

談天門院

⑧おもふともいははほどへん月日には心のくまもあらじとぞ思ふ

皇后宮

御返し

⑨ことのはにいほぬ月日はつもれどもおもひ出でばとたのみこそせめ

野宮にて梅を

達智門院

⑩神がきのよそにはへる梅がかをしめのうちまでさそふ春風

(臨永・巻五・神祇)

延慶元年八月野宮よりいでたまふとて

皇子内親王

⑪すずか川やそせの波はわけもせでわたらぬ袖のぬるる比かな

(玉葉・巻十五・雜二)

⑦は野宮時代の冬の歌であるから徳治二年冬。⑩は野宮時代の春の歌であるから延慶元年春の歌。⑧⑨の贈答は母談天門院とのものであり、親子の情愛を詠み込んだものである。この後しばらく皇子内親王の記事は見当たらない。応長元(三三二)年十月三日には京極為兼に玉葉集撰進の命が下る。この集は正和元(三三三)年三月二十八日一応の完成を見、正和二年十月頃完成。皇子内親王の歌は先の⑩の他⑬⑭の二首が入集。二十七、八歳までの歌である。

恋歌の中に

皇子内親王

⑫とにかくに心ひとつをつくしまていつを思ひのはてとかはせむ

(巻九・恋一)

雑歌の中に

皇子内親王

⑬をりにふれ特におぼゆるかなしさをたくひあらじとながめてぞふる

(巻十八・雜五)

⑬の「をりにふれ時におぼゆるかなしき」が目を引く。この「かなしき」とは何であろう。辨子内親王はこの歌が示すように「ながめてぞふる」という姿勢を生涯持ち続けたのではなかったか。現状をただ見つめるだけで、打破することはもちろん、客観視することも批判批評することもなくただそのままに受け止め、時を経る。そういう女性であった。

次いで、文保二(三三六)年十月三十日二条為世に続千載集撰進の命が下る。元応元(三三〇)年四月十九日四季部奏覽、元応二(三三〇)年七月二十五日返納。この撰進の命が下ってからしばらくして詠まれた歌が⑭⑮である。

続千載えらばれける比歌をかきあつめて内裏へたてまつらせたもふとてつゝみがみにかきつけられ侍ける 達智門院

⑭玉ならぬわかか浦ばのもくずをも君みがくばとかきあつめつゝ、御かへし 今上御製

⑮みるからに心移りてわかか浦やみがける玉をわきぞかねつと (臨永・卷十・雜下)

この集に入集した歌は先の⑦⑧⑨の他に⑯⑰⑱⑲の四首で、三十五歳までの詠である。

(夏歌の中に) 皇后宮  
⑯たづねばや忍ぶの山の時鳥心のおくの事やかたると (卷三・夏)

(月の歌中に) 皇后宮  
⑰秋はぎの花の露に影とめて月もうつろふ色やそふらん (卷五・秋下)

(題しらす)

後醍醐天皇をめぐる三人の齋宮たち — 辨子内親王・權子内親王・祥子内親王 —

⑳照しける光もよそのかけならでもとみし月の都なりけり (卷十・釈教)

折不逢恋といへるころを

皇后宮

㉑神がきやよるべの水も名のみしていのる契のなとよむらむ (卷十二・恋二)

すでに㉒でみた、辨子内親王の「をりにふれ時におぼゆるかなしき」は㉑の「たづねばや忍ぶの山の時鳥心のおくの事やかたると」とあるように、人には語れぬものであったにちがいない。人には語れぬが、ほととぎすとなら我が心の奥深くにしまつてある「かなしき」を語れよう。いや語りたい。そういう切ない思いが詠ませた歌であった。

この集の成立に先立ち、文保二(三三六)年三月二十九日に即位した弟後醍醐天皇は元応元(三三〇)年三月二十九日に姉である辨子内親王に皇后の尊称を授ける。当時の贈答が㉒㉓である。立太子から十年、漸く即位できた喜びが窺える。

達智門院きさきだちの比おそぎくらにつけてたてまつらせ給うける 後醍醐院御製

㉒またれつる心ひらけて遅桜にほひ久しき色ぞことなる 御返し

㉓今ぞげに心ひらけて君が代に花もかひある色をそへける (新千載・卷二十・慶賀)

この年の十一月十五日、母談天門院が薨じ。辨子内親王は三十四歳。同日院号達智門院を賜わり、母の初七日十一月二十一日尼となす。法名は真后宮(「女院記」)とも真理寛(「女院小伝」)とも。

先に見てきたように⑬⑭と心の奥底を見つめる歌があり、⑮のような釈教歌があった。そして、慈愛ふかい祖父の死、それらを土台にこの母の死が加わり、出家の道に入ることになったかと思う。母の死の五年後、正中元(二三三)年六月二十五日父後宇多院崩御。五十八歳であった。増鏡に「御門また御服たてまつる。あけくれねんごろに孝じ奉り給ふさまいとかたじけなし。御女の皇后宮と聞えし、今は達智門院と申すも、まいてひと所をのみ頼み聞えさせ給へるに心細ういみじと思し嘆くこと限りなし。」とある。これにより、母の死後は父を最も頼りとして生きてきたことがよくわかる。彼女の嘆きはいかばかりであったか。しかし、これまで彼女は肉親の情愛に恵まれてきた。祖父、父母に愛され、弟にも慕われてきた。齋宮卜定という不運はあったものの、常に心の寄りどころはあった。元亨元(二三三)年から元徳二(二三三)年頃、後京極院とかわした贈答が⑳㉑である。

後西園寺入道前太政大臣申しおきて侍りける琴を、宣政門院いまだ一品の宮と申しける比たてまつらせ給ふべきよし達智門院へ申させ給ふとて 後京極院 御返し

⑳行末をゆづりおきける松の風つたへむ千世のこゑぞしらるる (新千載・卷二十・慶賀)  
後西園寺入道前太政大臣とは元亨元(二三三)年九月十日に亡くなった西園寺実兼、宣政門院とは元徳二(二三三)年十二月十九日齋宮に卜定された後京極院の娘権子内親王。その一品の宮宣下は元応元

(二三三)年十月二十八日。後京極院とは実兼女で後醍醐天皇。あるいは宣政門院はその齋宮卜定まで驛子内親王のもとにいたものか。

元亨三(二三三)年七月二日には二条為藤に統後拾遺集撰進の命が下る。が、正中元(二三三)年七月十七日五十歳で二条為藤が亡くなると、十一月一日に二条為定にあらためて統後拾遺集撰進の命が下る。正中二(二三三)年十二月十八日には四季部奏覧、嘉暦元(二三三)年六月九日に返納。この集には驛子内親王の歌が三首(㉒㉓㉔)入集。四十一歳までの詠。

題しらず 達智門院

㉒ほのかなる雪まばかりの忍音はなはたどらるる郭公かな (卷三・夏)

(恋の歌の中に) 達智門院

㉓いかなればあはでの浦に焼く塩の煙は名のみ立つ世なるらん (卷十一・恋一)

(恋の歌の中に) 達智門院

㉔はかなしや又はいつともしら露のおきて別るる袖に消えなば (卷十三・恋三)

㉕ではまた、ほととぎすを詠み込んでいる。統後拾遺集撰進下命の元亨三年秋には二条為世によって統現葉集が成立。増補され、正中元年あるいは二年に完成。この集には㉖㉗㉘の三首が入集。

舟中暮春といふことを 達智門院  
㉖ゆく舟のあとなきかたを慕ひても春はとまらぬ八重のしほ風

(卷二・春下)

古寺初雪といふことを

達智門院

②いかにばかり埋もればてんたかのやまけさだに深きみねの白雪

(巻六・冬)

寄月神祇といふことを

達智門院

③くもりなき君がやちよをてらすらし神ちの山にいづる月かけ

(巻十六・神祇)

元徳三(三三)年夏か秋には臨永集成立。⑩⑭を含め、⑳㉑㉒㉓  
の七首が入集。

(題しらず)

達智門院

④あかずのみ詠る色もいつまでと思へばつらき山ざくら哉

(巻一・春)

題しらず

達智門院

⑤おらで社たちよる人もすぎにけれ月とのみみる宿の卯花

(巻二・夏)

(神祇歌としてよませ給うける)

達智門院

⑥君が代をてらさむ末の光にぞいはとを出し月日なるらん

(巻五・神祇)

題しらず

達智門院

⑦数々に契りをかずはかくばかりいひしにかはる程はしられじ

(巻七・恋中)

(浦千鳥をよめる)

達智門院

⑧しがの浦やこぼる波まに鳴千鳥とをさかり行声ぞさびしき

(巻九・雑上)

この後、南北朝の動乱が続くが、延元四(三三)年八月十六日、弟

の後醍醐天皇が五十二歳で崩御。この頃の歌が⑨⑩。

おなじ(後醍醐天皇かくれさせ給て後)比、かの震筆のうらに  
理趣経をかかせ給ふとておぼしめしつづけさせ給ける

達智門院

⑨いはざりきこの水ぐきのながれても残るかた見の跡とみよとは

(新葉・巻十九・哀傷)

後醍醐天皇かくれさせ給ける年の冬、雪のいたうふりける日よ  
ませ給ける

達智門院

⑩いにしへの涙もかくやくれ竹の色かはるまでふれる白雪

(新葉・巻十九・哀傷)

弊子内親王の歌は全部で三十七首残存するが、就中⑨は出色の出来  
である。弟後醍醐天皇を亡くし、その波乱に富んだ一生を思い返す  
時、翻弄されながらも姉として常に弟を慈しみ、頼みともしていた  
ことが今更ながら窺われる。祖父を、母を、父を亡くしたその時  
々、悲しみを一番身近で分ち合ってきた弟はすでにこの世にない。  
動乱の世にありこれから頼るべきは何であろうか。同母の兄弟は、  
他には承覚法親王と性円法親王がある。承覚法親王は天台座主で勅  
撰集・私撰集に各十四首の計二十八首を残す歌人であるが、弊子内  
親王との接点は見い出せない。性円は大覚寺門跡で弊子内親王より  
六歳下。二十歳の応長元(三三)年には大覚寺宮として大覚寺門跡  
略記に見えるから、早くから仏門に入ったか。即ち、二人とも早く  
から俗世を離れた人であり、年齢的にも後醍醐より若く、そういう  
点から交流が少なかったか。この他弊子内親王の歌は白鹿元(三三)年  
以前に成立した藤葉集に⑪⑫の二首が入集。

後醍醐天皇をめぐる三人の斎宮たち — 弊子内親王・権子内親王・祥子内親王 —

題しらず

達智門院

⑦ 変るよのかねてしらるゝ物ならばさのみは人に契らざらまし

(巻五・恋上)

達智門院

(恋歌中に)

⑧ 大かたにきだめなきよのうたがひはやがてぞ人の心なりける

(巻六・恋下)

達智門院

また、死後の勅撰集である新千載集に⑨⑩⑪の他に⑫が、新拾遺集に⑬の他に⑭⑮が、新続古今集に⑯が入集。

おなじ(恋恋)心を

達智門院

⑰ つひにきてうき世がたりに成りやせんせかるる袖のなみだならねば

(巻十一・恋一)

題しらず

達智門院

⑱ おのづからこほらぬひまも氷りけり月かげさむき山川の水

(巻六・冬)

(恋歌中に)

達智門院

⑲ 重ねてもなれにし中のさよ衣へだつる物といつ成りにけん

(巻十四・恋四)

神祇を

達智門院

⑳ 神風やふたつのみやの宮柱ひとつ心に世をまもるらし

(巻二十・神祇)

辨子内親王は後醍醐天皇の崩御後、史料に見えないが、正平三(三四)年十一月二日、六十三歳で薨。その生涯はいかにも皇女らしい生涯で、終生未婚で美しく清らかに老いていった。残された歌の中では哀傷がすぐれ、四季を詠み込んだものの中にも透明感のあ

る秀逸なものが多い。その恋の歌は題詠のみで、生涯激しい恋愛をすることはなかったようである。それは肉親の豊かな愛情に恵まれていたためかと思われる。

その女房については、内侍と兵衛督がいる。

。皇后宮(達智門院)内侍

(題しらず)

皇后宮内侍

① かはらずはたつねもみばやみわの山ありし梢の杉のしるしを

(統千載・巻十四・恋四)

冬の歌中に

達智門院内侍

② 通ひける心いづくをわけつらんみかきの雪はあともみえぬに

(統現葉・巻六・冬)

。皇后宮(達智門院)兵衛督

皇后宮兵衛督

恋の歌中に

皇后宮兵衛督

③ 伊勢の海のアまのもしほ火たくなはのくるればいとどもえまさり

つつ

(統千載・巻十二・恋二)

秋の歌の中に

達智門院兵衛督

④ むかしたれ秋のあはれをしりそめて今も涙の露こぼるらん

(統現葉・巻四・秋上、新拾遺・巻四・秋上)

寄夢無常をよみ侍ける

達智門院兵衛督

⑤ よのうさもいか計りかは歎かれむはかなき夢と思ひなさは

(新現葉・巻八・哀傷、新拾遺・巻十・哀傷)

題しらず

達智門院兵衛督

⑥ をしは山峯の霞の深みどり松にぞ春の色はみえける

(臨永・巻九・雑上)

(羈旅のうたとよめる)

達智門院兵衛督

⑤旅ねする夢はさながら都にてさむるうつゝはうつつ山越

(臨永・卷十・雑下)

達智門院兵衛督

(忍恋)

⑥人しれぬ心のとふもうきものをうたて涙の袖にもるらむ

(新千載・卷十一・恋一)

達智門院兵衛督

(恋の歌の中に)

⑦つらきにもうきにも人の忘れぬ心や何のむくいなるらむ

(新千載・卷十三・恋三)

達智門院兵衛督

無常念念至の心を

⑧とりべ山みねに絶えせぬうき雲やおくれさきだつ煙なるらん

(新千載・卷十九・哀傷)

達智門院兵衛督

忍恋の心を

⑨せきかねておつるばかりぞ今も猶音にはたてぬ袖の滝つせ

(新拾遺・卷十一・恋一)

二人とも齋宮時代からの女房か、それ以前からの女房か、あるいは皇后宮時代からの女房か不明。内侍が二首、兵衛督が九首の歌を残しているが、嬖子内親王との贈答はない。和歌をよくする内親王ともにあつて、刺激を受けつつ、和歌制作に励んだものか。

(題しらず)

前齋宮節折

①忘れ行く人ばかりこそつらからめ身をさへさのみ何うらむらん

(続千載・卷十五・恋五)

前齋宮節折

(擗衣をよめる)

②かすかなる音はとをちの里のなもとほぬにしるくうつ衣哉

後醍醐天皇をめぐる三人の齋宮たち — 嬖子内親王・權子内親王・祥子内親王 —

題しらず

(続現葉・卷五・秋下)

③我あとも人のしるべとなりけりまづわけさむるのべの白雪

(続現葉・卷六・冬)

前齋宮節折は続千載集、続現葉集の歌人。これらの集の成立時の齋院は不在であり、前齋宮といえは嬖子内親王。その齋宮時代の女房か。退下後ひき続き内親王に仕えたかどうかは不明である。

## 二、權子内親王

權子内親王は正和四(三三〇)年十月、後醍醐天皇の第一皇女として誕生。母は後京極院。同母の兄弟はない。元応元(三三六)年六月二十六日五歳で内親王宣下、同年十月二十八日一品に叙される。この後しばらく權子内親王の名は見えない。次に權子内親王の名が出るのは元徳二(三三三)年十二月十九日。十六歳で齋宮に卜定、翌元弘元年八月二十日野宮に入御。増鏡に「后の宮の御腹の一品内親王、御卜に合わせ給ひて、去年の冬ごろより御きよまはりありつる、今日明日齋宮に居給ふ。八月二十日まづ川原へいでさせ給ひて、やがて野の宮にいらせ給ふ。その程の事どもいみじうきよらなり。」とある。その間、元弘元年正月十二日准三宮に叙せられる。野宮に入つてすぐの元弘元年八月二十四日、後醍醐天皇は京を脱出して奈良に向かう。増鏡には「中宮は忍びて野の宮殿のかたはらにぞおはし着きにける。」とあり、この時母後京極院は齋宮ながらただ一人の權子内親王のもとに身を寄せた。実はこれより少し前、嘉暦元(三三〇)年、後京極院は懷妊したかと思われたが残念ながらいくら

待つても皇子誕生のことがなかったという事件があった。この折には先の辨子内親王が信耀僧正に命じて准胝法をつとめさせている。十七歳の元弘元年冬に退下。元弘三(二三三)年十二月、光厳上皇の後宮に入る。そのことを女院小伝では「密入<sub>三</sub>上皇宮」と記す。たとえ光厳上皇に望まれたからといって、何故に南朝の後醍醐天皇を父に持つ権子内親王が北朝の光厳上皇のもとに走ったかはわからない。そのわずか二ヶ月前の十月十二日には母後京極院が没しており、母の喪中であるのにかかわらず、なのである。「密入」ということからすれば、父後醍醐天皇は全く預り知らないことであつたかもしれない。

元弘三年十月十二日、三十一歳で母後京極院が亡くなって後、結縁灌頂記に拠れば、その三回忌の結縁灌頂を建武二(二三三)年十月十二日三条実忠第で行なっている。その折には後京極院の姉の昭訓門院、その子の恒明親王も参加している。この年、二月二日には宣政門院と称され、光厳院の後宮に入つてからは皇女をもうけている。統史愚抄に拠れば、「建武二年」十一月四日辛亥、宣政門院降誕皇女。」「(建武四年)十一月四日庚子。宣政門院御産。皇女。比日五壇法結願。」と、二ヶ所にわたり十一月四日皇女誕生の記事が見える。御産御祈目録には建武四年のもののみが記載されており、その中の尊胤親王の天台座主宣下及び賢俊僧正の僧正宣下の時期より建武四年のものにまちがいない。御産御祈目録から二年のものが欠落していたか、ことによると統史愚抄の建武二年の記述が誤りか。同日誕生というのが気にかかる。本朝皇胤紹運録に光厳院女として名があるのは光子内親王のみ。他に皇女がいながらその名が欠落し

たか、生まれてすぐ亡くなったか。光子内親王の欄には母の名はないがあるいは宣政門院の娘であつたかもしれない。ともあれ、この時光厳院が皇子誕生を切望していたことが春日神社文書から窺われ、その寵愛は深かつたようである。ところが、興国元(二四〇)年五月二十九日俄かに出家。女院小伝に拠れば、「潜出<sub>三</sub>上皇御所一御出家」とある。その突然の出家は他に原因が考えられず、前年八月十六日に崩じた父後醍醐天皇を悼んでのものであつたように思われる。未だ二十六歳の若さだつた。師守記では仁和寺河窪殿において御出家とあり、皇代曆、統史愚抄に拠れば、西郊保安寺において落飾とある。この後、貞治元(二六三)年五月七日に四十八歳で亡くなるまでどのようにすごしたか全く不明であるが、父母の菩提を弔いつつ安らかに死を迎えたものか。所生の皇女のその後については全く不明である。

権子内親王の歌は次の七首である。

(題しらず)

宣政門院

①人は猶これぞこの世のわかれともしらず契りし程のはかなき

(新千載・卷十三・恋三)

恋歌の中に

宣政門院

②かねてよりありはつまじき契ぞと思ひながらもなれしくやしき

(新千載・卷十四・恋四)

(題しらず)

宣政門院

③九重のむかしがたりもかなしきにほひなそへそ軒のたち花

(新千載・卷十六・雑上)

題しらず

宣政門院



④年なみはかへらぬ物とくれぬなりむかしを今に思ひなせども

(新千載・卷十六・雑上)

世をのがれさせ給うての比

宣政門院

⑤今はとてひきわかれぬることのをに涙の露のかかる比かな

(新千載・卷十七・雑中)

題しらす

宣政門院

⑥すみぞめの袖の涙のたままも思ひ出づるはうきむかしかな

(新葉・卷十八・雑下)

題不知

宣政門院

⑦今ははや水のしらべも忘れにき結びしままの跡はあれども

(新葉・卷十八・雑下)

①②は恋。詠作時期は不明。辨子内親王や祥子内親王の恋歌が非常に観念的であり、題詠としてしか受けとれないのに対して権子内親王の恋歌は題詠ながら、光厳院の後宮に入り、皇女を生んだという体験の故か、その歌には真実が見え隠れする。②の「なれしくやしき」など題詠では詠めない実感こもる歌である。⑤は出家の頃の歌である。「ひきわかれぬる」と詠まれたのは夫である光厳院かあるいは娘か。出家後とはつきりわかるのは⑥。③④はいずれも過去を振り返っての詠であり、出家後のものか。ここで注目すべきは「九重のむかしがたりもかなしき」や「思ひ出づるはうきむかし」という過去を振り返る姿勢である。④では、全く今にも嘆息がきこえてきそうである。過去への哀愁を秘めた回想。それは南北朝の動乱期に後醍醐天皇を父に持ちつつも、その父に背いて北朝の光厳院の後宮に入った後悔か、あるいは夫も子も捨て再び父のもとに出家とい

う形に戻ろうとした彼女の夫や子に対する懺悔の気持ちか。その波乱に富んだ人生も出家後は回想の世界で静かに過ぎていったであろう。⑦は③④⑤⑥の雑の回想の歌の系列の歌であるが、新鮮味の漂う歌である。「水のしらべ」という言葉も新鮮、「結びしままの跡」とは素晴らしい表現である。純粹な自然詠というより、いつも過去の出来事が揺影する。

### 三、祥子内親王

最後の齋宮。彼女を以て齋宮は廃絶する。生没年未詳。祥子内親王は後醍醐天皇の第二皇女。母は新待賢門院。同母の兄弟には恒良親王、成良親王、義良親王(後村上天皇)、惟子内親王がある。彼女の齋宮卜定は元弘三(三三三)年十二月二十八日。この後、帝系図裏書(醍醐三宝院本)に拠れば「建武三年、依世上之乱、御退出自野宮、経年序之後落餽、作比丘尼」とあるように建武三(三三三)年兵乱により野宮を退下するまで最後の齋宮としてつとめた。誕生の時期については齋宮野宮時代にすでに百首歌を詠めるだけの力を備えていることから、卜定時十五歳にはなっていただろうと思われる。権子内親王誕生以後、正和五(三三六)年から元応元(三三九)年ぐらいまでの誕生かと思う。今、その残された歌十七首をできるだけ年代順に並びかえ、その一生をたどってみたい。

野宮に久しく侍りける比、夢のつげありて大神宮へ百首歌よみて奉りける中  
祥子内親王

①いすず川のむ心はにごらぬをなどわたるせの猶よどむらん

(新葉・卷九・神祇)

野宮より退下の後雪をみて

祥子内親王

② わすれめや神のいがきの榊葉にゆふかけそへし雪の曙

(新葉・巻九・神祇)

後村上院芳野の行宮におはしましける比、よみ侍りける歌の中に

祥子内親王

③ 名にしおふ花のたよりにことよせてたづねやせましみよしの山

(新葉・巻一・春上)

正平七年きさらぎの十日あまり、芳野にまうでて塔尾の御陵などみたてまつりけるに、花はまださかぬ比にてよろづ物あはれにおぼえければ思ひつづけ侍りける

祥子内親王

④ さく花のちるわかれにはあはじとてまだしき程を尋ねてぞみる

(新葉・巻十六・雑上)

題しらず

祥子内親王

⑤ 山ふかみ花見がてらに尋ねばやうき世のがるすみかありやと

(新千載・巻十六・雑上)

世をのがれて後、保安寺に住みける比その寺の長老かくれ侍りければ思ひつづけける

祥子内親王

⑥ 残りるて思ふもかなし法の道たづねし時はおくれやはせし

(新葉・巻十・釈教)

さまかへてのち、螢をみてよめる

祥子内親王

⑦ あつめねどねぬ夜の窓にとぶ螢心をてらす光ともなれ

(新葉・巻十六・雑上)

(題しらず)

祥子内親王

⑧ 呉竹のうきふしぶしのつもりしぞ世をそむくべきはじめなりける

題不知

(新葉・巻十八・雑下)

⑨ 山のはに猶入りやらでつれなくもうき世の中に有明の月

(新葉・巻十八・雑下)

題しらず

祥子内親王

⑩ たちのぼる煙のすゑをよそに見ばさびしかるべき柴の庵かな

(新葉・巻十七・雑中)

題しらず

祥子内親王

⑪ 程もなき月日をそへて歎くかなくれゆく春をしたふのみかは

(新葉・巻十六・雑上)

(題しらず)

祥子内親王

⑫ なにをしてすぎつるかたの月日ぞとさらにおどろくとしのくれかな

(新葉・巻六・冬)

①は「野宮に久しく侍りける比」とあることから、卜定後すぐの歌ではなく、少なくとも二、三年たった頃のものであろうか。建武の新政後、足利尊氏の謀叛により戦乱が再開された建武二(二三三)年頃の歌であろう。恐らく「天下を太平にするために百首歌を作り折れ」というような夢のお告げがあったのだろう。歌才のあつた祥子内親王はそのお告げに従い、心をこめて百首歌を詠んだ。その中の一首が①である。この五十鈴川は少しも濁っておらず清らかなのに、どうしてこの世の中はこんなに乱れているのだろうか、と乱世の時局を齋宮としての立場から嘆いている。こういう時局を客観視し、批判する歌は珍しい。女性は政治を直視することなく、自らの世界に籠りがちであるが、彼女は決して時局に背を向けず、直視し

ている。②は野宮退下後の歌である。すでに退下が建武三年であることは述べた。この歌からそれが冬であることが明白となった。建武三年十二月には父後醍醐天皇が吉野に遷幸している。恐らく、この時を以て祥子内親王も野宮を退下したものであろう。②は野宮退下後、その生活をなつかしみ詠まれたものであるが、斎宮らしい崇高で清浄な歌である。③は「後村上院芳野の行宮におはしましけり比」とある。後村上天皇が芳野の行宮にあったのは延元四(三三〇)年十月五日踐祚から正平三(三三〇)年一月賀名生に逃れるまでである。歌中に「花のたよりにことよせてたづねやせまし」とあることから春。興元(二四〇)年から正平二(三三七)年春に限定できよう。④は詞書にあるように正平七(三三三)年二月十日過ぎに吉野塔尾にある父後醍醐天皇の御陵を訪れた時のものである。父の死に目に会えなかつた娘の気持ちを詠み込んでいる。④からすると、祥子内親王は父と共に吉野に下らなかつたことが判明する。彼女はこの頃どこに身を寄せていたか。⑤はまだ出家前の歌のようである。③とよく似ている。尋ねたのは吉野山であつたか。出家を志し、それにふさわしい場所を探している様子を詠んだものか。⑥は「世をのがれて後」とあるから出家後のことである。その詞書から祥子内親王は出家後、保安寺に住んでいたようである。保安寺といえは、異母姉権子内親王出家の寺(統史愚抄等説)である。そうであれば姉妹そろつての仏道三昧の生活を送つたものか。「その寺の長老」は誰か不明。保安寺については統史愚抄に「在洛中、又同号寺在伏見辺」とある。大日本寺院総覧に拠れば、現在京都市下京区今熊野町に保安寺があるという。これは洛中に在つたという保安寺

か。今一方の保安寺については本朝皇胤紹運録の光明院の条に「文和四八八自河州東条行宮出御伏見殿。其後御保安寺。」自正平三年御出所々御経行。とあるものをさすか。権子内親王の出家した保安寺は後者であり、光厳院の弟光明院が訪れたのは保安寺が天皇家にゆかりのある寺であつたためか。あるいは祥子内親王は父後醍醐天皇が吉野に逃れた後も京に残り、異母姉権子内親王を頼つたものか。⑦は「さまかへてのち」とあるから、出家後のものである。⑧は「世をそむくべきはじめなりける」と詠んでいることから、これは出家前のものとは考えられない。出家をしたから、このような回想を持つて歌が詠めるのである。ここで言う「呉竹のうきふしぶしのつもりしぞ」というのは南北朝の動乱、個人的には肉親の死をも含む悲しみをさすのであろう。出家の時期は恐らく父後醍醐天皇の崩御延元四(三三〇)年八月十六日以降であろう。⑨は乱世、時期は特定できないが、戦乱が続いている頃のものであろう。⑩はずでに出家後のもの。「柴の庵」がそれを示す。或は母新待賢門院薨の頃か。①②④は年歌年代がほぼ明らかであるが、それ以外は不明。今、祥子内親王の出家を後醍醐天皇の崩御後と考えてみたが、それにしても、①②の後のことか、③の後のことが、④の後のことか全く不明である。便宜上④の後にまとめて⑤⑥⑦⑧⑨⑩を配した。

⑪は「くれゆく春をしたふのみかは」とあることから、正平二十三(三三六)年三月十一日の弟後村上天皇の崩御の折のものか。三月に亡くなった身に近き人は後村上天皇のみであることから、そう考える。⑬は年末に「いつたい何をしているうちに過ぎ去つてしまった月日だろうかと思つていると、その上にはつとするとどう年の暮で

あつたことよ。」と詠んだものである。誰しも経験のある日常を詠み込んでいるが、その真実故に悲しいばかりの実感がこもっている。現代にも通用する感覚である。彼女は晩年、この歌に寄せて「ああ、いったい何をすてすこしてきた年月であつたらうか。はつとすると、もうこんな年になつてしまつていたよ。」と詠みだかつたのかもしれない。その生涯は南北朝の動乱期にあり、翻弄されているうちに一生が終つてしまふ。何とかして自分らしく生きたい、世の中に弄ばれたくないという気持ちに詠ませた歌か。

月歌中に

祥子内親王

⑬はるかなるふもとをこめてたつ霧のうへより出づる山のはの月

(新葉・巻四・秋上)

(恋歌中に)

祥子内親王

⑭いかにせんしのをぎさのかりにだに逢ふ夜はしらぬ中の契を

(新葉・巻十二・恋二)

(題しらず)

祥子内親王

⑮いかにせん後の世とだに契らねばこひしぬとても頼なき身を

(新葉・巻十二・恋二)

恋の歌中に

祥子内親王

⑯おもかげぞ猶わすられぬあだなりし契は夢のうちに成しても

(新葉・巻十四・恋四)

逢不逢恋を

祥子内親王

⑰ほのかにも見しは夢かとたどられてさめぬ思ひやうつつなるらん

(新葉・巻十四・恋四)

⑱は「月歌中に」とあるから題詠か。絵画的雲囲気を持つ歌であ

る。詠まれた時期は不明。⑭⑮⑯は恋。いずれも忍恋を詠んでいるが、観念的にすぎ他の歌に比べておもしろみがない。実体験が伴わない証か。

#### 四、三人の視点の相異

今、弊子内親王、權子内親王、祥子内親王の各々の生涯について見てきた。ここでは三人のその生涯における歌を通しての視点の相異についても少し考えてみたい。

弊子内親王は弟後醍醐天皇の死を悼んで詠みあげた歌が彼女の三十七首の歌の中でも出色の出来だとすでに述べた。弟の死を悼む思いを切々と述べた歌を残す齋宮を歴代齋宮の中に探せば大伯皇女がいる。大伯皇女との比較によりその視点を明らかにしてゆく。

大伯皇女は資明七年正月八日誕生。父は後の天武天皇。白鳳二(七〇)年四月十四日齋王となり、同三年十月九日伊勢下向。朱鳥元(六八)年九月九日天武天皇崩後の後、同母弟大津皇子の事件後、十一月十六日帰京し、大宝元(七〇)年十二月二十七日四十一歳で没。彼女の歌は万葉集に六首残る。

大津皇子竊下ニ於伊勢神宮上來時大伯皇女御作歌二首

105 吾勢帖乎 倭辺遺登 佐夜深而 鷄鳴露尔 吾立所霽之

106 二人行狩 去過難寸 秋山乎 如何君之 独越武

大津皇子薨之後大來皇女從伊勢齋宮上レ京之御作歌二首

163 神風之 伊勢能国尔毛 有益乎 奈何可來許武 君毛不有尔

164 欲見 吾為君毛 不有尔 奈何可來許武 馬波尔

移三葬大津皇子屍於葛城一上山之時大來皇女哀傷御作歌二首

165 宇都曾見乃 人尔有吾哉 従明日者 二上山乎 弟世登吾將見

166 磯之於尔 生流馬醉木乎 手折目杼 令視倍吉君之 在常不言尔

いづれも弟大津皇子を思つて詠んだものばかりである。105 106 165 166 の四首について言えば、その心は時を超えて嬪子内親王の歌に通ずるものがある。しかし、彼女は嬪子内親王の力量をはるかに越えていた。大伯皇女は残る163 164の中に、表立つての批判ではないが、大津皇子を死に至らしめたもの——時の権力者に対する声にならない批判の思いを漂わせている。163 164では「神の国である神聖な伊勢の国にそのままいけばよかつたものを。どうして大和へ帰つて来たのだろうか。弟の大津皇子もすでに生きてはいないのに。」もはや会いたいと思う弟大津皇子も亡くなつてしまつたのにどうして京へ帰つて来たのだろうか。長旅で馬が疲れるのに。」と、単に弟の死を嘆くだけではなく、斎宮を解かれて上京することをむしろ、嫌がついてるかのようである。本来ならば弟の死を知り、そのただ一人の肉親（母大田皇女は幼少の頃すでに死亡）として、その菩提を弔つてやりたい。鳥のようにすぐに飛んでいつてその孤独な死を弔つてやりたい。その墓前に額突きたい。そう思うはずである。が、彼女はそうではなかつた。望んでも許されるわけではないが、いつまでも齋王としてこの伊勢の地で神に仕えていたい。彼女の歌の中には人の世のどろどろとした野望の渦巻く大和へなど本当は決して帰りたいくないという思いが脈々と波打っている。それは未婚の皇女として、政權にまつわる抗争に対する嫌悪だけではなく、齋王として伊勢に下つてから十一年間培われてきた神に仕える齋王としての見識もあ

つた。世の乱れ、争いを愛い、一段高いところから、単に弟の死というものだけでなく、時の政治をもしっかりと見据えていた。それだけ大きな視野を持つていたのであり、齋王としてのプライドも高かつたのである。この大伯皇女の歌の底流の政治批判に通ずるものが嬪子内親王の歌ではなかるうか。彼女は最後の齋宮として齋宮らしい崇高で清浄な歌を残していることはすでに述べた。齋宮としてのはっきりとした自覚を持つていたわけだが、大伯皇女が置かれていた環境とはまた違う南北朝の動乱の中で、時の人後醍醐天皇の娘として、しっかりと時局をみつめていたのである。伯母嬪子内親王が現実の世の中に背を向けるようにして弟後醍醐のみをその視野に置き生きたのと違い、嬪子内親王はその時代でなくては詠めない、素通りできないものにしつかりと目を見据えているのである。その生涯についてはほとんど不明であるが、その出家も恐らくは肉親の死という単純なものではなく、それは契機であり、その出家は時代を愛えたものであつたに違いない。歌の力量もさることながら、その広い視野は嬪子内親王の持ちえなかつたものである。彼女にとつて歌は単に自分の人生を詠みこむものではなく、人の世の濁りを愛えるものであつた。それはその押さえられた表現の中にみごとに生きている。それは大伯皇女がそうであつたように神に仕えた齋宮としての現世を客観的に見する姿勢の賜であつた。それは伊勢の齋宮になつたからといって誰しもが必ず持つてるといふものではない。同じ状況にあつても、その姿勢を持ちえられない者もいる。しかしながら、齋王となつたからにはその姿勢を持ちうる可能性が強いのである。後はそれぞれの齋王がその立場をどう理解し、位置づけるか

ある。世の中の濁りを知りつつも世の中に背を向ける者、何ら深く考えることなく自分の殻の中でその一生をすごす者、いろいろである。むしろ、問題意識を持ち、はつきりと口にする者の方が少ないであろう。その少ない者の中の一人が大伯皇女であり、祥子内親王である。時代も置かれた環境も異なるが、その歌には時を超えて相通するものが潜んでいる。さて、もう一人の斎宮権子内親王の歌の視点はどうであったか。彼女には弊子内親王のような優れた哀傷歌は残されておらず、また祥子内親王のような時局を冷静に分析し、愁えるという技量もなかったようである。ただ三人のうちではただ一人後宮に入り、子をなしたということもあって、その恋の歌の説得力はすばらしい。しかし、すでに述べたように雑の歌はいずれも、

ただただ自分の世界に籠り、過去を回想するのみである。祥子内親王が、客観的に時局を批判したのに対し、彼女の目は過去にのみ向けられていた。  
後醍醐天皇をめぐるこの三人の皇女をその残された歌を通してみてみると、その生き方は三者三様である。しかし、その生き方がどうであれ、弊子内親王はその弟の死を心底から悲しみ、すばらしい哀傷歌を残し、権子内親王は北朝の光厳院の後宮に入りながらも後醍醐天皇の死を悼んで出家し、祥子内親王は最後の斎宮として父後醍醐天皇の政治を客観的にみつめたという点で、やはり後醍醐天皇の影響を大きく受けた者たちであった。

〈関係系図〉

